

すべては幸せを感じるために

やまなみ工房

山下完和

社会福祉法人やまなみ会やまなみ工房

滋賀県甲賀市甲南町葛木 8 7 2

TEL0748-86-0334

WEBSITE a-yamanami.jp

1986年、滋賀県甲賀市に誕生したやまなみ工房は、現在 84 名の利用者と 23 名のスタッフが個々の「力」を発揮し、それぞれの希望、そして幸せに向かうことを目的とした多機能型施設（生活介護・就労継続 B 型）である。

様々な表現活動を通し、障害のあるなしにかかわらず穏やかに心豊かに成長すること、その人がその人らしく健康で生き生きと過ごせることを目指している。

◆彼らが喜びで満たされ真剣に向えるものが今ここにあるのか

つい先日のことである。業務を終えた私達は、いつものスタッフミーティングにおいて、ふと時間を止め、それぞれの思いと役割について互いに再確認をした。「考えましょう。私達は今、彼らの希望に向かっているのか」と。

一日を振り返ると、スタッフの様々な工夫と配慮が今日という日に込められ、利用者であるアーティストが穏やかに過ごせたことは言うまでもない。アーティスト同士がお互いの違いを受け入れ、尊重しながら調和を保っていることもその工夫がよい影響を及ぼしているからであろう。

ただ「グループ」としての過ごし方や「集団」としての関係性において、「楽しい一日であった」「無事に終えた」と、ある一定の評価を共有したとしても、果たして私達はそれで満足しても良いのだろうか。

私達が描いた理想の一日を基準に彼らを測り、彼らの満足度を都合よく判断してはいないだろうか。

たとえば「決まった日課をこなさなければならない」「グループとして、こんな一日にしよう」といった、施設のシステムや支援者の予定を無難にこなすことが目的になり、「個」の存在を見落とすことはあってはならないのだ。私達は「その人らしくあることを尊重し、その希望を叶えること」という大切な目的から目測を誤り、「集団」や「日課」に捉われ、彼らの希望ではなく、私達の理想に向かっているのではないだろうか。

それぞれに自問自答をし、私達はあらためて確認をした。

自分の内面に忠実であり、常に自分の希望に向かっている彼らにとって私達自身の存在が制約や制限になってはいけない。アーティスト一人ひとりの「個」に対する思いを今以上に高め、目の前の彼らが喜びで満たされる明日を目指そうと。

◆それぞれの時間と空間、そして幸せ

やまなみ工房のアーティストにはそれぞれに「これをする事で私は幸せである」というものがある。時間の使い方や落ち着く空間も多種多様、できること、できないこと、したいこと、したくないことも様々である。私達は彼らに何かを作ってほしいとか、描いてほしいと一方的な期待を膨らませているわけではない。そもそも施設をアート化するつもりも、施設にアートを取り入れるという考えもなかったのだ。

大切なのは、彼らが他律的に生きるのではなく、彼らの自発性を尊重し豊かな生活を送ること、彼らの本音に向き合うことである。どんな作品を作るかどうかが重要ではなく、彼らが言葉や態度でありのままの自分を表現し、楽しく過ごすことが重要なのだ。

彼らの様々な表現は一人ひとりの希望の形だ。「今何をしたいか」「今日どう過ごしたいか」という彼らの「つもり」を奪って、私達は意に反することをさせてはいけない。私達の立場が彼らより上位だと意識させてしまうような関係では彼らの本意が見えないどころか、自己表現の意欲さえも閉ざしてしまうだろう。私達は常に対等の立場で、個々の興味や要求に丁寧に向き合い、一人ひとりのできないことに着目するのではなく、その人のこだわりや特徴を大切にすること、いいところを模索するのだ。

当然のことであるが、彼らは一律ではない。過ごし慣れたやまなみ工房の中でさえ、何かをするときは一人でないと落ち着かない人もいれば、常に集団の中にいないと不安を感じる人もいる。10時から15時という限られた時間の中で、自分のしたいことに向かうのは午前中だけの人もいれば、午後だけの人、一日15分という人もいれば、1ヶ月に1日の人もいる。

表現方法には一人ひとりにスタイルがあり、そのことを物理的に最大限可能にする個々の対応が求められる。価値観や多様性を一まとめにしようとせず、彼らを一律に扱うことのない環境設定が重要なのだ。

彼らの表現は他律的に設定された時間や空間の中には収まりきれないし、収めてはいけない。日課や作業として取り組むのではなく、彼らの好む時間と安心できる空間、創造力が高まる様々な経験、表現に必要なあらゆる素材をふんだんに揃え、彼らが好奇心に駆られ、常に新鮮で目を輝かせずにはいられない工夫が必要だ。

アーティストの幸せのために何が必要か。

ありのままの彼らがのびのびと自己を表現できる環境を整えること、彼らの真の喜びに共

に向かうことである。

◆表現活動とは自分自身の世界を築くこと

わかりやすい絵画や陶芸だけが表現や作品ではない。私達の概念からはよくわからないものの中にも、その人らしさや唯一無二の輝きを放つものもある。表現活動とは誰にも歪められず自分自身の世界を築くことである。

やまなみ工場のすべての利用者にそれぞれの表現が存在する。彼等の表現は様々だ。一日特定のことに取り組む人、特定の言葉を発し続ける人、なかには紙を破き続ける人もいれば、何もしないこともまた表現の1つではないだろうか。

そもそも彼らの多くは自分自身の日々の行為や表現がアートであるかどうかなど関心がないように見受けられる。中には社会的な価値や称賛に関心を示さない人もいる。すべては自分のための行為なのである。

私達は自身の価値や概念をもって彼らと接するのではなく、その独特の発想と価値観に常に寄り添い、その行為や表現を肯定し尊重することが責務ではないだろうか。間違っても、彼らの行為や表現に手出しや口出しをしたり、自分たちの価値観を押しつける立場ではないことは明白である。

すべての利用者に豊かな表現と可能性があると断言する。

彼らの表現が社会の中で美術として評価されるか否か、高価な価値があるか、自分の好みに合うかどうかなどという、彼ら自身の目的と無関係な価値基準で優劣をつけるようなことをせず、彼らと、彼らの表現に対する尊厳があるかどうかは何より重要なのである。←ここで文章が終わりますと、途中で終わっている(尻切れな)印象がします。そのためには彼らの一人ひとりが自分の目的に一途に向い、ペースを乱されることなく心安らぐ環境を整えること、あるがままの自分が存在できる場所で自由に自分の可能性に向かうための支援が求められる。

自らが大切な価値ある存在であると感じられる日常の中におかれてこそ、生きる喜び、表現する喜びが生まれるのではないだろうか。

◆信頼関係の中から放たれる個の輝き

やまなみ工場の利用者にはもともと表現活動を得意としてきた人はほとんどいない。

多くの方はやまなみ工場に来て自発的に取り組み始めた人ばかりである。

私達は日頃から描くための道具や縫うための道具、粘土など自由に使える素材をふんだん

に準備している。しかしそれらに触ることを強要することもなければ、手を取って教えるといった指導らしいことは一切しない。目の前の素材を使うか使わないか、どう使うかは自由である。

私達が求めているのは、彼らが自分の思いをどう表現するかであり、彼らから私達に求められるのは、「待つこと」ではないだろうか。

規格に則って取り組む作業と比較し、粘土や絵の具などの素材は形を自由に変え、視覚や触覚に様々な驚きや刺激、そして発見を与えてくれる。その上、他者から失敗や間違っていると指摘を受けることもなければ、比較されることもないので、人と人の間に生まれる障害もない。

作りだした物よりも、作りだすための時間と行為が大切な彼らにとって、表現の素材は付き合いやすく、真剣に向き合える数少ない媒体の一つではないだろうか。

それぞれが素材に向き合うなかで、ある事に気が付いた。時不思議に感じるがあった。彼らが日頃から独創的で個性的だと感じる理由の一つとしては、他者にあまり関心をあまり示さず影響を受けにくいからだと考えていたが、その概念は間違っていたのだ。（←「考えていた」で終わりますと、今は考えていないことになりますが、今はどのように考えておられますか？）たとえば同じ空間にいて誰かが粘土をしていても、自分もしなければならぬと衝動に駆られる人はいない。

活動を始めた当初、ほとんどの利用者が粘土や絵の具に目もくれなかったが、現在、様々なアーティストによる魅力的な表現から多くの作品が生まれている。

私達は長い年月の中で、その人のありのままの表現や行為をいかに引出し形にするかを考え工夫を凝らしてきた。そのことが何らかの良い影響を与えたことはもちろん皆無ではない。

しかし今こうして次々に作品が生まれる理由は、優れた指導がここにあるからではない。設備が整備されたからでもない。アーティスト同士、アーティストと私達の間にある強い信頼関係が生まれ、孤独を感じることなく安心できる時間と空間があるからだ。

信頼関係があるからこそアーティストたちは、互いの存在や表現に影響を受けを自分の中に取り込み、それが相乗効果となって多くの作品を生み出しているのである。

表現活動の現場において不可欠なものはただ一つ、信頼関係なのだ。

アーティストとスタッフ、またアーティスト同士が、どちらかが優位に立つことなくフラットな人間関係を保っているからこそ、個の輝きが放たれるのではないだろうか。

◆誇るべきスタッフの存在

やまなみ工房には、現在私以外に 23 名のスタッフがいる。現場、事務、厨房といった部署は大して意味がなく、アーティストにとってはすべてのスタッフが必要な存在だ。

スタッフの中には芸術や美術を専門的に学んだ人はいない。興味すらなかったというのが正直なところだ。だから絵画や陶芸に関するノウハウなどなければ、作品に対して芸術的な価値があるかどうかの判断を下すこともできない。

しかし私達が考える表現活動は、単にアート活動といった専門的で教育的な取り組みではなく、彼らの希望を形にすることであり、自分自身の世界を築くことなのである。彼らが自分自身の世界を築くことに対し、私達の力量や得手・不得手で可能性を閉ざしてしまうことは絶対にあってはならないのだ。

彼らを見ていて、私達スタッフは彼らの表現意欲に大きく影響を与え、欠かせない存在なのではないかと感じることもある。もちろん彼らと向き合うプロセスの中で私達が導き手となり、粘土や画材を準備することはあるし、制作の場を整えることや作品を管理するなどの手助けはするが、それらが彼らの意欲を高めているわけではないだろう。

彼らは私達の情熱や実行力、そしてありのままを受け容れる力に向かって表現するのではないだろうか。彼らの気持ちを動かし自分の世界を表現する意欲を高めるのは、アートを熟知した人の存在だけでは成り立たない。やさしい眼差しと嬉しい言葉、美しい真心で、彼らの気持ちをしっかり受け容れることができる存在が必要なのだ。やまなみ工房で多くの作品が生まれるのは、もちろん素晴らしいアーティストが存在しているからである。しかし 23 人の誇るべきスタッフの存在がなければ、彼らは表現どころか安心して過ごすこともできないだろう。

彼らの可能性をいかに引き出すかは、私達スタッフの人間性、そして力量にかかっている。専門性を高め、終わりなき成長を目指し、さらなる好奇心と想像力を養いたい。

◆無私の愛

やまなみ工房の表現活動の大きな支えとなっているのは、アーティストのご家族である。利用者の多くは自分自身の進路や生活の環境を整える際に、自ら理解することや判断することが困難な場合が多い。そうした場合、判断はご家族に委ねられる。

効率や就労、社会への適応が求められる現在の社会において、彼らの将来に対してご家族は多くの迷いや悩みを持ち、不安にかられることも少なくないであろう。社会性と人間性の中で様々な葛藤がありながら、彼らの存在を誇りとし、生きがいや価値観を尊重するご家族。

私達が現在やまなみ工房において対価や生産性だけを優先せず、こうしたゆるやかな日常を過ごせているのは、ご家族、特にご両親が、彼らと私達の活動に信頼を寄せ、すべてを肯定してくれているからである。

彼らに対する私達の方針とご家族の方向性が一致しなければ、彼らの努力や本質は見失わ

れてしまうのではないだろうか。様々な経験を経て選択したその時々^の決断、我が子に対する深い愛情、ご家族の優しさと強さから、私達は日々どれだけ大きな安心と学びを得ていることか。

彼らを絶え間なく別の何かに変えようとする社会で、自分自身に忠実であることの大切さ、ありのままがユニークで素晴らしいことだと背中を押してくれるご家族。

今、私達のやまなみ工房において、ご家族の無私の愛が、我が子だけではなく、すべての利用者に向けられていることに感謝の気持ちでいっぱいである。

◆彼らの人間性と生き様が社会を変える

やまなみ工房のアーティストの作品が、以前に比べ、国内外の様々な分野から注目されるようになった。全国各地で障害者の作品による展覧会も数多く開催され、社会の中で評価されていることは、彼らとご家族にとってもとても喜ばしいことである。28年前、こうした活動を始めた頃と比べると、現在のこの状況は信じがたい光景である。

これからも彼らの作品を社会に発信することで、新しい価値観や芸術観が作りだされることを期待したい。しかし、私達が目指すべきことは、作品に対する芸術的評価の高まりだけではなく、彼らへの正しい理解であり、障害のある人もない人も共に生きやすく心優しい豊かな社会をつくることである。そして多くの障害者が様々な活動を通じて、生きる尊厳を獲得することである。

今後も彼ら一人ひとりの表現や人間性から生みだされる様々な可能性が無限に広がり、人々が生きる上で本来最も大切にしなければならないのは何なのか、互いを認め支え合い、すべての人々が大切される社会の実現のためには何が必要かを考え、個性豊かな活力に満ちた地域社会、そして未来の実現を目指したい。

そのために私達がすべきこと、それは目の前の彼らに対し、一方的な抑制をかけることをせず、制約と制限を与えるすべてのことを取り除き、ありのままの彼らが今日も笑顔で満たされ輝きを放ち続けられる環境を整えることであろう。